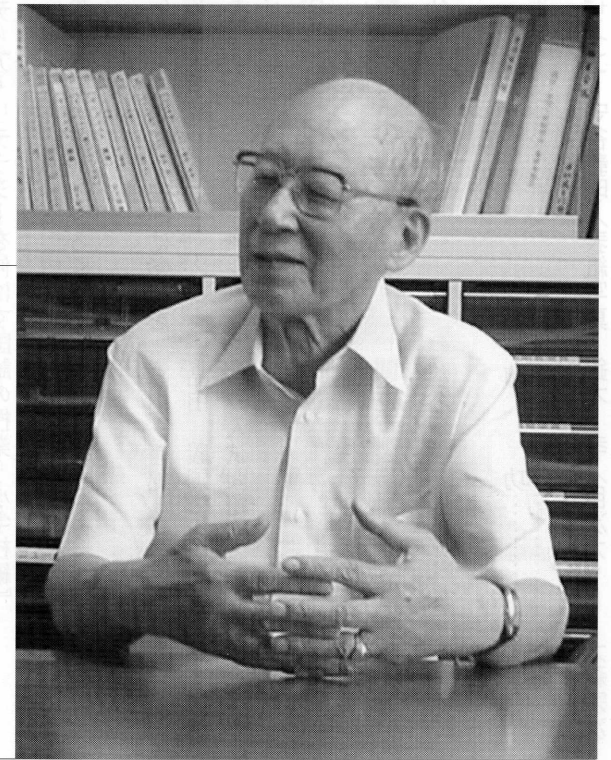


さいたま  
ここに人あり

## 内部被爆の脅威と現代

—被ばく医師・肥田舜太郎さんの証言—

聞き手 渡辺大輔（埼玉大学院生）

肥田舜太郎さんの  
プロフィール

1917年広島県生まれ。1944年陸軍軍医学校卒。軍医少尉として広島陸軍病院に赴任。1945年広島にて被ばく。ヒバクシャ救援にあたる。全日本民医連理事、埼玉民医連会長などを歴任。

現在、全日本民医連顧問、日本被団協原爆被害者中央相談所理事長。

**渡辺** 先生の最近お書きになられた『内部被爆の脅威』（ちくま新書、鎌中ひとみと共著）を読んで被ばくが自分の問題であると同時に全人類の問題だということが分かりました。今そのことに向かい合い、問い直し、次世代とともにどのような社会を創造し、市民としてどう参加するかが問われていると思います。読者の皆さんと内部被爆の脅威を自分の問題として捉えながら考えていきたいと思っております。

終戦60周年 被ばく体験を  
どう語り継ぐか

**肥田** 今年は終戦・原爆投下60周年。日本だけではなく国際的にも核兵器問題、原爆問題など関心が集まっています。各国とも特集番組を組んでいて、広島に集まりません。何故かと言えば単に原爆投下後60年ということだけではなく、ヒットラーとの闘いや欧州が戦争から開放されて60周年、平和に向かって動いていくはずが、イラク問題でアメリカが突出、妙なことになるって皆困り果てています。だからヒロシマ・ナガサキの世界は、被ばく問題の世界大会ではなくて、混乱している平和の危機を今後世界中がどう切り開くか、核兵器を中心に論議するというのでここに関心が集まる。明日から何したらいいかということをお互いが求めています。

問題の真ん中には核兵器があり、ヒロシマ・ナガサキ

が座っているわけです。一方でヒバクシャは自分の思い出の中にくすぶり抱えて死んでいくのではなく、体験した人間としての悲劇を世界中にどう受け止めてもらうかという大きな課題があるわけです。ただ「苦しかった、熱かった」ではなく、この爆弾は「人間にとってどういう意味を持っていたか」を皆で論議しなければならぬ。ところがヒバクシャも寿命が刻一刻と迫っている。語れるのは精々あと5年程度でしょうね。今までは個人的な体験だけを語ってきたけれど、自分というものがどういう位置にあるのかを考え始めた。みんな普通の平凡な年寄りだし、哲学的にも思想的に進歩しているわけではない。ただ「二度とこのような悲劇を味わわせたくない」という共通の、人間としての良心みたいなものがある。それが今集中してきている時期だと思います。

## ヒロシマ 尊厳なき地獄絵

**肥田** ヒバクシャが当日のピカドンでどういうものを見てきたかだいたい共通しています。目の玉が飛び出して人間を見て逃げただとか、死んだ赤ん坊を背負っていて、死んでいるのに気づかなくて、取り乱して、立ったまま死んだお母さんを見たとか。まあ想像もつかないような地獄が当たり前みたいに広がって、どう考えていいか分からない。そういう中で僕みたいに自分はドロドロにならずに、医者という立場に立った時に、まずは助

けなきやならないから倒れていれば何とかしたい。しかし手のつけようがない。そういう中で悩み苦しんだ医者はみんなそうだが、医者になったことを後悔しました。自分たちの習った医学がどんなに無力だったかを思い知らされましたね。僕が治療した戸坂村では、30人近い医者で100人近い看護婦も来ていたが患者の数は3万人です。医者が30人ですから一人あたり1000人です。どうにもならない。とにかくはじめて、3日間くらいは治療というよりも生死を判別するのが主でした。そのうちに自分の思考が麻痺してしまい、人間が死ぬという感じではない。3日目になると重度の人はほとんどいなくなり、何とかなるかなと思いはじめますね。医者の方も「これから僕たちの出番だ」と思っている矢先に不思議な病気が始まりました。

### 内部被曝の脅威

#### 「軍医殿、わたしやピカにあつとらんけんね」

肥田 当時は原爆、放射能なんて知らない。ヒバクシャの症状としてはまずは高い熱がでて嘔吐とか鼻から血が出てくる。口をあけさせると、真っ黒に腐っている。後で分かったのは白血球がなくなって細菌と闘わなくなり、最初から腐敗が起るわけです。やけどしていない皮膚に紫色の斑点が出てくる。症状と照らし合わせて習った病氣と重ねるけれども重なるものは一つもない。わけが

分らない。

そういう中で袖をぎゅっと引っ張る男がいた。「軍医殿、わたしやピカにあつとらんけんね」という。爆心地から遠くにいたがヒロシマが大変だからと午後ヒロシマに入り救助を始めたという。みな見よう見真似で夜通しで救助した。明くる朝も同じことをやっていたらその男は急に目眩がして倒れ、急に吐き始め下痢が始まったという。これは被ばくした者みな同じ症状で高熱といつしよに下痢が始まる。ピカにあつていない人間が同じ症状になる。瞬間、疑問に思うけども、考える力もない。そういう数時間経つと同じように血を吐いて亡くなりました。仲間の医者も同じように診たと幾人もいう。伝染病に違いないと思った。しかし調べても伝染病ではない。被ばくしていないのに次々とそういう症状が出る。頭の中が真っ白になるくらい困りました。

悲劇はここから。今度は見舞いに来た、とんでもない遠くから遠距離から来た人が同じ病氣が出て死んだ。ちょうどヒロシマの一ヶ月前が臨月で松江に帰ってお産をした新婚一年目の奥さんが旦那を探して一週間後にヒロシマに入って焼け跡を歩いた。そうして、最後に村を歩いてめぐり合ったんですね。本当に劇的なめぐり合いで回りの人も喜んだ。あの時は喜びとか人生の美しさを感ずることが一つもなかった。みんな悲惨で肉親も周りの者もみんな死ぬ。村中に話が広まったんです。真っ暗な闇の中に花が咲いたみたいだね。何とかしてあの旦那に

早く元氣になってもらってと思って、みな自分の少ない配給、僅かなおにぎりの端をあの男に食わせるという親切なことがありました。それが旦那も氣遣いみたいに泣き叫ぶ中で死んでいった。後を追うように奥さんも同じように死んだ。それを見て僕らもどう考えていいのか分からないんです。

### 内部被曝の実相

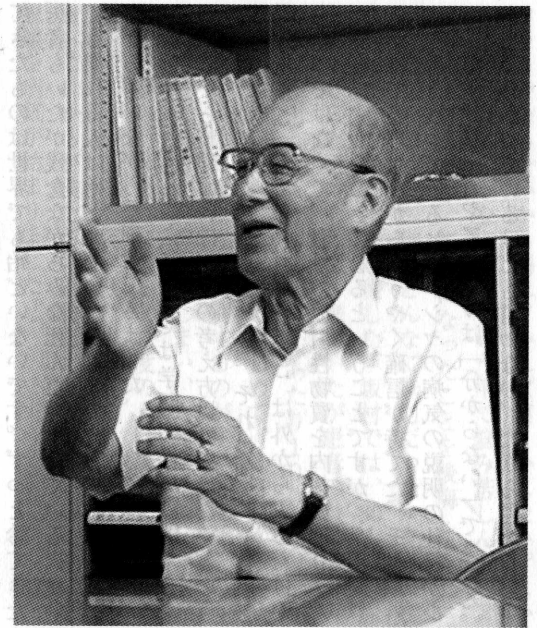
肥田 私は60年間、大体概算で60000人のヒバクシャを診てきた。被ばくし、どう死んでいくかを絶えずに診てきたものは世界でも殆どいないです。ずっと診てきた医者もいたが残念ながらみな死んだ。生きている人がいても喋れる人は殆どいない。これまで自分の体験を重ねながら習いながら整理してきました。

原爆被害は今までの医学では学問的には証明できない。しかし整理すれば、その考え方以外にはないということだけは確信が持てるんです。それは何か。「体内被曝（\*1）」です。放射線（\*2）は外から入るだけだ。恐いのではない、微量の放射性物質を内部に取り込んだ場合に大変なことになるといいますが、半世紀以上かけて整理しながらようやく確信が持てた。それ以外に今生き残っているヒバクシャの病氣の説明の仕様がなっています。厚生省やアメリカは「分からない」で逃げる。本当は分かっているけども言わない。だから言わない中

身はこうだろうということでも勉強してきた。何故自分がそうなったかという理屈じゃなくて、死んでいく人が何故死ぬかが分からないんです。核兵器、原爆の影響で放射線の影響でそうなると言われる癌や白血病の場合には、まあそうだろうで片付く。ところが医学的にも世界の常識でもまったくそんなものとは縁がないと思われているもので死んでいく。その人の死ぬまでの症状の移り変わりが被曝していない人の場合と全然違う。放射線の影響っていうのは日本人が実験台になって命を捧げだして記録を残したというものであって、まずはその記録を整理して学問的にはこうだというのがまだ明らかになっていない。そういう積み重ねの上で事実をもとに自分の中で発展をする。それをアメリカといくつかの国で進んだ学者が色々な圧力に抗しながらつくりあげた「低線量放射線（\*3）」というごく微量な放射線で影響を及ぼす、未完成な理論（\*4）があるんです。これを当てはめると今までの説明が全部つく。それを積極的に学んできた。それが『内部被曝の脅威』の背景です。

### 一点の灯 被曝から30年後の確信

肥田 ヒバクシャはどこの医者に行ってもなかったらいいけどと相手にしてもらえない。でもかかったらいいでくるんです。それはもう原爆のときから知っている。ヒバクシャの特徴です。でもどうしたらいいかは分からない。



普通の患者みたいに注射して薬出してさよならって帰して安心できない。どういうところでどういう寝坊をして何を食っているか。一緒に住んでいる人間がどういう人間かが分からない、飢え死にするかもしれない。そういう患者の生活の背景まで考える習慣を付けてくれたのもあの当時のヒバクシャや労働者の一番貧しい人たちの医療をさせてもらったおかげで、そういう術を身につけた。そういう中でたくさんヒバクシャが死にました。でもまだ何のことだかは分からなかったですね。分かったのは30年後です。長いですよ、これは。30年経ってはじめて自分の診ていた患者が体内に入った放射線の影響で起こ

る症状だつてことをアメリカの医者によって教えてもらいました。

**渡辺** スターングラス(\*5) 先生ですね。

**肥田** スターングラス、彼もアメリカで孤立しているんです。政府や軍部やらに目をつけられてね。当時は原発も始まりましたから。彼は大胆な学者です。最初に起こったスリーマイルス島事故、チェルノブイリと同規模で、その周辺にいる人たちの妊婦にまず影響が出ると彼は予測した。妊婦を疎開させると言つて知事に談判しに行くが知事はそんな重大な決定を自分でできない。ぐずぐずしているうちに3日間経つて時機を逸する。それでスターングラスがもう気違いみたいに「責任は自分がとる」と言つて疎開に出した。しかしもう遅かったんです。遅かった妊婦の中から奇形児が出てきた。それが新聞に出て彼は有名になった。有名になった代わりに袋叩きなんです。学会でもどこでも。

その後、アメリカの被ばく米兵がいっぱい出た。実験のために新しい兵隊が送られて全部で25万人の兵隊が被ばくした。病気発症は3、4年後ですからみんな除隊になった後ですよ。軍隊は「関係ない」と。その患者の相談を受ける医者も何人か出てきた。一生懸命診て、どうもあの実験に縁がありそうだと。そこまでは分かるんだけどどうしたらいいのかわからない。それがスターングラスのところにもな集まり原爆の放射線被害者をめぐる医師のグループができた。

1992年に僕もアメリカに行きました、ずいぶんあとです。僅かなものを飲み込んで何年か経つと、その影響で病気になるというのはわからない。多くの医者は、「からだの中に入ったものはからだの防護によって小さな放射性物質はからだの外にはじき出される。そんな僅かな放射線がそんな大病を起こすわけがない」という。小さな放射線が体内に入って何十年間もずうっと放射線を出し続けている(\*6)ということに考えが至らないんです。最初に入った放射線は瞬間に抜けるが、体内に入った放射性物質は残つて排除されるまで放射線を出し続ける。1000も2000も入ったものが0になるまで排出されるのに、10年単位で時間がかかる。その10年のあいだにどこかがやられる。そういう筋道をちゃんと突き止めた何人かの優れた医者があるんです。しかし医学が認めるときは病気がずうっと広がっちゃっている。

今まで電気をつくつて文明を支えていた資源がなくなるといって核エネルギー(\*7)に目がいった。どんなことが起こるか分からないけど引つ張り出して成功。しかしこれをコントロールする力を持たないで使えば人類は滅びる。放射線をコントロールするすべての英知とお金を集中しなければならぬ。その邪魔になつてくるのが「核兵器の製造と使用」です。造る側は世界の頭脳を集中し必死になつて新しいのを作っている。

これをやめて余つた頭脳とお金を全部集中して30年、

50年経れば放射線を人類が安全にコントロールする可能性がある。人類はむざむざと放射線に殺されるとは思っていない。だけどその前に核兵器のもとを潰さなければならぬ。両立しないのです、この問題は。ただし新しい障害が絶えず出てくるから大変だけど、みんな命を守る方向で団結出来ればね。そのためには兵器を造らないし、戦争そのものも止めていくという英知が進めば人類は残るだろうと思つている。

### 私たちの生活と被曝

#### 〜我々は被曝してゐる〜

**渡辺** 1950年代に繰り返された大気圏核実験で人工放射性物質(\*8)が未だに大気中に浮遊し、アメリカのハンフォードにある大規模核施設の風下では、汚染された土地で作られた穀物が放射能を濃縮し、それを日本の商社やファーストフード産業が買い占めています。人工放射性物質が食物を通して世界中をまわり、食物連鎖によつて間違いなく我々は体内被曝を起こしてますよね(\*9)。無垢な食べものは殆どなくなつてくるかと思つていますが、日常生活で被曝していることすらリアリティーを持つて感じられないことも現実だろうと思つています。

**肥田** 自分それは分かりません。大衆レベルで暴動が起こるくらい食ひ物がなくなつたとか、何とかしろつて世

界中で暴動が起こる。そういう風に大衆はならないものです。まず科学者、医師を中心として危険だということでも一致すればそのまわりに知識人がいますからね、あってもないこうでもないとかいうではないですか。では何食ったらいいかとか。

しかしわずかでも入っていればみんなすぐ死ぬわけではない。ヒバクシャでもみんな死なないで26万人生き延びている。放射性物質が中に入っても排出されて抵抗力があつて全然受け付けないものもあればね。そういう意味でも危険性というのは核戦争によつてもすごい濃厚なものを全部にばら撒くということがない限りは今の食物連鎖が続く範囲で人類が絶滅するというのは言い過ぎだと思う。ただ基本の方向はね、ここを外れて核兵器を造る方、戦争する方を野放しにして発電だけやるつたつて無駄なんです。原発闘争の人たちによく呼ばれて行きます。確かに原発は危険だと思う。しかしそれより危険なのは核兵器を造る方なんです。

### 被曝体験を世界へ〜市民と民主主義〜

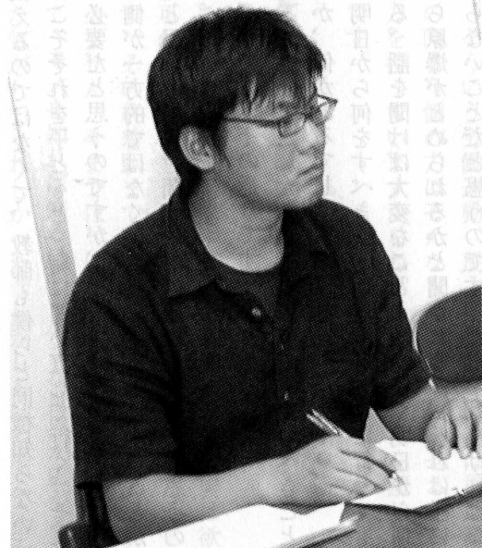
渡辺 『ヒロシマを生き延びて』（あけび書房）で世界中の講演活動の記録を読ませてもらいました。肥田先生が話されるその言葉が、言葉として成立するとき、そうでないときがあつたかと思えます。言葉が成立するときというのは相手が受け止めてそのことを自分の問題とし

て考えられたときだとすれば、今までの体験の中でこれから、どのようにして言葉をつなげていくのか、体験の中から今思うことを聞かせていただけませんか。肥田 ずいぶんもどかしい思いをしたことは事実です。どんな爆弾だったのか、アメリカつてとんでもない爆弾落としたのかつてアメリカでもそういうんです。でも受け止めた人も家へ帰つて僕の言いたかった趣旨でちゃんと伝えられるかつていつたら、とんでもない。彼にとつちゃ、びつくりはしたけど、どういふ風に説明したらいいのか分からないというのが現実だと思います。感動したつていう人はたくさんいるんです。

ドイツで、戦争抵抗者同盟という平和団体の集會があつた。会場は満員だった。そうしたらその中にドイツ国防軍の将校が2人制服で入つてしまった。皆ワーワー言った。議長の捌きがまず立派ですよ。始まる前に「ここに国防軍の将校がいる。まずなぜここにいるのか聞こうではないか」と。すると「俺たちは最前線の将校だ。戦争が始まればおれたちは真つ先に死ぬ。核戦争だということ聞いています。ところが核戦争とは何かを知らない。ヒロシマの核戦争を経験している医師が来ているということ聞いたから俺たちはそれを聞きたい、だから是非聞かせてくれ」と。議長は「ああいつているけどどうする？」というところを聞いて「聞かせろー！」つていう。そこで僕の話が始まった。終わりが近づくと「今ドクタ―から聞いた話は忘れない。全部仲間に伝える。核戦争

からは軍人も国民も生き残れないということは良く分かつた。俺たちはそれをちゃんと伝える」という。日本の自衛隊ではこれを言えるものはまずいないと思つた。ドイツ人はヒットラーとの闘いを命がけで反省して、本当に国民の一人ひとり血のにじむような討論を何年も続けたというその一人だと思ひました。つまり人権意識、命を捨てる側の兵隊の中にもちゃんと入っているんです。「自分たちは軍人だから命令には従う。しかし闘いの意義がどうであれ国民全体が死ぬような闘いにすべきではない、それだけはよくわかつた」という。そういう反応が出て世界中を歩いたかいがあつたなと。

日本ではいくら話してもそういう反応は帰つてこな



い。明日自分に起こる問題と誰も思っていないから。日本の核兵器廃絶運動の弱点は、絵を見て、やけどした絵を見て爆弾が落ちたらこうなる。しかし爆弾は落ちつこないよ。落ちたつて遠くに落ちれば大丈夫だよ。どこに落ちてもダメだつていうこと。だからたとえ沖繩に落ちても東京でもダメだつていうことを本当に分かつたかどうか。これならみな怒り出す。僕はそのためにみんなが言わない危険を、これが通らなければ核廃絶運動が本当の物にならないと思うから言っているんです。ようやく去年あたりから原水協の真ん中の人たちが良く分かりました。僕が言いたい中身は「おっかないからやめようや」ではなくて、「これを止めなければ本当にみんな死ぬ」ということ、そのことをみんな勉強しなさいと言おうと思う。

### 核有国ニッポン 〜この国に生きる市民の責任

渡辺 私の友人に六ヶ所村出身の子がいます。

肥田 大変ですよ

渡辺 内部被曝について勉強させていただいた範囲の中でそのことを話したんです。すると「あその核処理施設がどれだけ危険なものかは知っていたけれども、内部被曝については知らなかった」と。今、事実を子どもたちに伝えなければいけないと思つた。それを教師が一方

的に教えるのではなくて、教師も僕らと同様知らない。だからこそそれを子どもと一緒に問い直して行く。それが必要だと思うのですが、先生の医療活動のように、こちら側が一方的ではなく、お互いにともに歩むことが大事だと思うのです。問われているのは大人だと思っただけです。

**肥田** そうです、その通りです。

**渡辺** そのこととこれからの学校教育で果たすべきことというか、何かあるでしょうか。

**肥田** 明日から何をすべきかというのはどこに行っても聞かれる。話を聞けば大変なことと分かる。明日から何をしたら原爆がとめられるかと聞かれるが、それは誰にも分からないことだと思っただけです。ただ学ばなければならぬことは、私はドイツの国民が戦争の後たどった道です。世界中から憎まれ、大変な残虐なことをしたという意味では日本と同じですね。アメリカもそうだけれども、日本も加害国で被爆国でもある。その本質を国民があの戦争をもういっぺん突っ込んで、なぜ起こったのかの原因を10、20年でもかけて考える時間を持つことでしょう。そのあとに憲法を学べば、あの憲法が命がけのものということが分かったんだと思う。本当に血のにじむような思いで憲法を考えた人間が何人いるか。いると思う。僕はドイツに行つてある中学生の子どもに学びました。「日本人はアメリカにあんなにやつつけられたけど、その前は世界中は日本は悪い国だと思われたらう。た

て、孫は民主的な教育を受けているから、人間がそうやって行く過程っていうのが分かるわけです。それで「うちのおじいちゃんでも長い色々な経験をした人たちの話を聞いて、言いたいことはみな言つて、主張することはみな主張してやればやるほどあの戦争が誰にでも分かる。どうして日本の国はそれをやらないんだ」と言われた。一言もないですよ。

今日を少し変えなければダメなんです。自分の家族に「自分は今先生しているけども学校のありようによつては、良心を貫けばいつ首になるかは分からない」と。「良心を貫くためには家族全部がこの世の中をよくするためにならなければならない」という風に大人が変われるかだ。そういう労働運動、民主運動でなければ根は浅い。今の向こう側の力はそんなものは簡単に崩せるくらい暴力を持っていますからね。その点を僕は心配しているのです。

### 今を生きる 暴力への抵抗と連帯へ

**渡辺** これまで人類が発達する中で自然科学の発展は欲望と不可分であったし、その終着駅が核であったらうと思いません。その終着駅まで来ているのではないかと思わざるをえません。今までは、例えば先生の本を読ませてもらつて、モノを知れば知るほど、小さな世界が広がる。成長した気がしてうれしかった。しかしもはやそんな生

くさんの国がお前の国と戦争してきた。おまえの味方はドイツとイタリアしかない。みんな悪い国だった。そういうことをどれくらい勉強したか」と聞かれたんですよ。だから「恥ずかしいけれども日本の国民はいろいろな事情があつて、だらしがないことだけれどもそれが十分でき切つていない。むしろ私はドイツでどういう風にそれが進められてきたかを学びたいと思つてきた」と。

すると「家の話をしてやる」と。おじいさんは役場の職員で戦争が終わつて安心していたら、ヒットラー、ナチスを勉強するという運動が起つて隣組で始まつた。一家の代表でおじいさんが出てきた。なんどやつてもおじいさんはあの戦争をまちがつていたとは承認しないと。日本の今やつていふことと同じで、「ドイツは資源がなく、いいところはとられた、生きていくためにはアフリカでもどこでも行つて石油を取らなければならぬ。何百年も先を見越してヒットラーは非常に苦しい闘いをやつた。戦争である以上色々な矛盾を含んで無理を承知でやるから、国民には無理がかかる、それは耐えなさいいけない」とがんばる。しかし何度やつても袋叩きにあう。中にはおじいさんの味方もいるがだんだんいなくなつていく。おじいさんが服するまで3年かかるとすね。おじいさんとうとうべそをかきだして「オレはとうとう孤立した。誰も俺の味方をしてくれない。そうするとオレのいうことはどこか違つているのかもしれない。」今度は家の中で論議になる。孫はそれを聞いてい

ぬるい状況ではないことを前にすると、絶望的になつてしまします。先生の活動で「平和について話をしたときに、相手と笑顔で平和を語り合う。なんでこんなにすがすがしいんだろう」と綴られています。その喜びとは一体何なのかと思うのです。今が闇だとしても、その闇の中でどうこの状況に問いを發し続け問い直していくのか、その中で社会に参加して、その中でどういう喜びを感じ生きていけば良いのかということ。

**肥田** それはね、僕は自分が行動してたくさんの相手との反応の中で自分も変わつていける。あなたが今、僕の本なんかを読んで、いろいろしてもどん詰まりのように思えてくると。僕はそうではないと思う。というのは外国へ行つて核兵器の話をした人間は本当に僅かしかない。ヒバクシャでも体験話に集団で連れて行かれて、通訳として連れていかれた人もいれて、せいぜい全部集めても1000人もいません。日本の外交官も商社の人間でも核兵器の話をするのはだあれもない。ヒバクシャだけでしょ。連れて行く原水協だけでしょ。ほんの僅かですよ。8月になると全国から集めた貴重なお金を向こうの人に旅費も宿泊費も出して何人かの活動家と呼んでずうつと育ててきたんです。ずうつと。数からすればたかが知れているし地球の人口からすればカスみたいなもんでしょ。これが、いつの間にか核と縁もゆかりもないアフリカの、国連に入つていふというだけの、192カ国が核兵器反対の方に賛成票をいれていふ。

がどんな誘惑をしても一歩も引かない。そこまできた。なぜこうなっているのか。やはりたゆまず核兵器の恐ろしさを訴えてきた草の根の反応だと僕は思っている。23歳ではこれから大変ですよ。既存の教育界を占めている教育委員会のくだらない人とか校長とかたくさんいるでしょうよ。昔の明治憲法の教育精神をいまだに持っている。子どもは教えなければダメだという頭の人が。子どもは導いてやれば自分で伸びる、それを伸ばさないうちに間違った方向に教え込んで押さえつけるのが日本の今までの教育でしょ。そういう古い日本の中で子どもを教えていくのは医者が病気を治す以上に困難ですよ。

## ヒバクシャとヒューマニズム

### 市民とは誰か

**渡辺** 埼玉で200名くらいのヒバクシャの方々のご存命だということを知ったんですが。

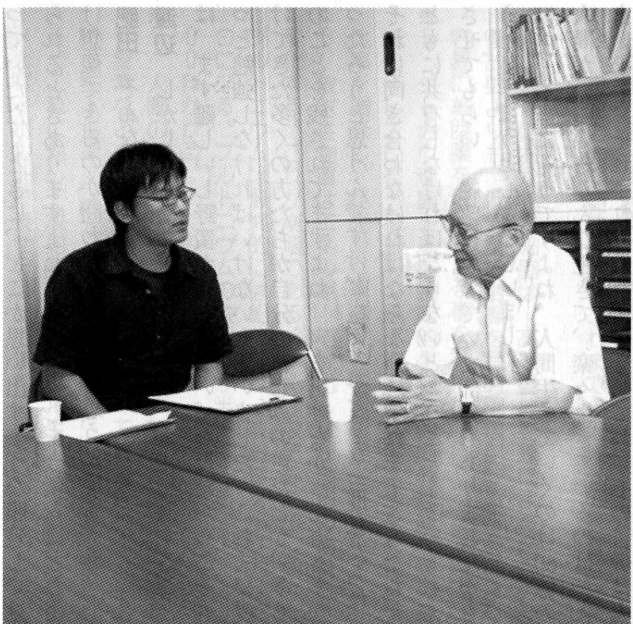
**肥田** 埼玉には3000人いますよ。

**渡辺** 3000人ですか!?

**肥田** そうです。どんどん増えます。全国で仕事が東京に集まっている。みんな来るんですよ。はじめは親が来て子どもが連れてこられて親が死んで、若いヒバクシャが増えた。

**渡辺** 二世ということですか?

**肥田** いや、二世ではなくて、一世のときの一番若いと



貧乏で孤立した者もいればたまされた人もたくさん知っている。けれどヒバクシャみたいな被害は受けてはいけない。それだけはヒバクシャが統一して言います。金持った被爆者で立身出世したやつはいる。議員になったやつもいる。そういう意味でも人間としてはいろいろだけど原爆だけは許してはいけないというのは共通している。

人間として忍べないようなものをああいうのを僕は見

きに被ばくしたのが60歳ですから。いまの64〜65歳の被爆者は殆どよそから来た人なんです。それで、これからは減っていきます。二世は殆ど普通の人とおなじです。僅かな人はいますけれどももう期待はできない。むしろヒバクシャのまわりで平和のための運動のなかで目覚めたたくさんの大衆が、先生方や高校生が被ばくを学び、いろんなことを学んだ人が体験と本質を受け継いでいる。いろんな平和運動の源流になって行くだろうと思う。だからヒバクシャから何を学ぶかと言ったら「ヒバクシャがどういう根性で生きたのか」を聞いて欲しいのです。被ばくしたときどんなに苦しかったかは、そこまでいけば東京で家ごと焼けたのと同じですよ。苦しかったのは戦後ですから。迫害と差別と自分の病気と。絶対の悪条件を背負って困難な経済状況を生き抜いたんです。何を柱に生きてきたのかと言えば、家族への愛情や死んだ友達への申し訳であったり、複雑なものが色々絡んでいる。こんな畜生を土台にしてみな生きてきた。でもお金はできなかった。みな貧乏。けれど貧乏の中で人間は鍛えられた。喋らせれば難しいことは言えないがちよつとやそつとじゃへこたれない根性だけは持っている。

共通なのは90歳のおじいさんおばあさんまでが核兵器は二度と使つてはいけないというのには共通している。理屈ではなく「こんな目に誰にも合わせてはいけない」というヒューマニズムなんです。どこの人間もこんな目にあつてはいけない。ひどい状態はみんな知っている。て、普通ならとても生きていけないような状況の中をはいくつばつて生きてきたという経験は目の前に敵がいる場合は別なんです。誰が敵だか良く分からない。落としたときはアメリカだけど、戦後は、敵は近所となりの人なんです。誰も助けてくれない。役所に行つても役所は相手をしない。政府も役所も味方じゃない。遠い親戚を頼つたら身内だから何とかするって、通り一遍の女でも男でもなくて放り出されて、信頼するものは何も無い。孤立して苦しみながら15年くらい経つて地域にヒバクシャの会ができる。それで少しづつ寄りそいあう。そうするとお互い同じ目にあつていてから心が許せるわけです。それが被団協という団結を作るもたんです。僕はそこへ行つて、「あんたがた死んで悔しいだろうから、人より長生きしろ。被ばくをしなかった人間より長生きして、自分たちの受けた被害を本當の事を話せ」と。そして「アメリカに止めさせようではないか。それをできるのはあんたがたしかいないんだから。長生きしろ。話とか何かするのはできる人に教える。あんたがたはまず長生きしろ。からだの揉み方を教えるから一生懸命勉強しろ」と呼びかけました。

## 問われている想像と学ぶこと生きること

### 声なき声に耳を澄ませる

**渡辺** 最後に、先ほどから戦争の体験や多くのことを語

つていただくとときに、どこか思い出すような眼差しで見られるときありますよね。あの眼差しを今僕らはどれだけ想像できるのか問われているかと思うんです。

**肥田** そんなことないですよ。

**渡辺** しかしどんなに想像してもリアルに想像することは、まず難しいし野蠻かもしれない。ただだからこそもっと勉強しなければいけないと思いました。これまで受けてきた多くの方たちが自分の苦しみの声だとか、多くのことを残されていますよね。声を出せなかった方も多かつたろうと思うんですけども、それをもう一度私たちは、それに向き合わなければならぬ。それを子どもたちとともに共有しなければならぬということに改めて考えさせてもらい、絶望に思っていた部分もありましたがもう一度学ぼうと心から思いました。

**肥田** 本当にそうですね。人間生きていくのは60億の人間がいろいろな生き方で、楽々生きてるのは一人もいない。それぞれみんな苦勞をしてね、その苦勞は先祖から伝わってきた苦勞とおなじように見えるけども少しづつ開って良くしながら来た経験を持っているんですよね。それを信頼して絶望しないで。生きているんだから。急に楽になるわけでも偉くなるわけでもない。昨日の自分を大事にして、明日を。

私は今このトシになってもずうっと予約が入っています。12月まで入っている。予約があるからそこまでは行かなければいけないんですよ、どうしても。約束しちゃう

【注】

※1 ニットの被ばく形態がある。爆発時に爆弾から放射された放射線が体を一瞬に貫通する「体外被曝」。もう一つは、爆発後に空中や水中に放出されて残留した微量の放射性物質が体内に入り長期にわたり体内から放射し続ける「体内被曝」がある。

※2 放射線は色も形も無く、肌で確認することも出来ない。故に被ばくの実態が極めて分かりにくい。そもそも放射線とは何か。放射線を出す物質を「放射性物質」。放射線を出す能力を「放射能」と言う。

※3 貫通力の弱い放射線。これまで、人体への影響は無視され続けている。

※4 液体におかれた細胞は、高線量放射線による頻回の反復放射よりも、低線量放射線を長時間放射することにより容易に細胞膜を破壊できる事を示した。ペトカウ理論。

※5 ペトカウ理論を基に臨床的・生物学的に低線量被曝の脅威を示している。核施設の風下での癌発生率や奇形児誕生比率を調査し、核施設と被ばくの因果関係を示した。

※6 放射性物質はエネルギーを放出しながら別の物質へと変化する。これが崩壊である。例えば放射線を出し切ったプルトニウムは最終的には鉛になり、放射線を出す力はゼロになる。プルトニウムの放射能が半減するまで1万2000年かかる。

※7 人間の肉体の生命活動を作り出す新陳代謝活動は酸素や窒素など多数が行う化学反応によって維持される。その時のエネルギーはすべて電子ボルトという単位で表される。これに対して放射線の持つエネルギーは100万倍のメガ電子ボルトで表せるほど桁外れに大きい。この莫大な

つたんだから。だから毎日を大事にしてね。88になっても毎日朝2・5キロ歩いて。夜は、このごろ週に二回になりましたけども6時からプールに行つて1キロ歩くんです。それで僕の体力を保持している。

**渡辺** すばらしいですね。

**肥田** だからばあさん連中がみてね。先生のこれ（肌）が羨ましいってね、何つけているんだってよく聞かれるけど何もつけていない。「俺と同じような生活すればなるよ」って言うけれど、自分は自分の目標もってこまめに生きなきゃいけないと。それにはどうするか。自分で計画して計画したことをちゃんと守って、ぐずぐずしないで、雨の降った日にはいやな時もあるし、寝ていたいと思つたこともあるけれどもこれをやらなきゃ、この約束に出来ないと思つているだけです。そういう生活をずうっとしてきたんですよ。別に理想があつて、こういう人間になりたいなんて思つたことは一つもない。裏を返せばくだらない普通の人間です。おなじことなんですよ。

**渡辺** お忙しいなか貴重なお話をありがとうございます。

7月20日 浦和民主診療所にて  
（記録・まとめ・渡辺大輔／写真・上原弘道）

エネルギーが体内に入り放射線を発し続ける。これがDNAを構成する鎖を直撃し、切断・損傷を引き起こす。人体には細胞修復機能があるが修復が間に合わないまま細胞分裂が繰り返され、突然変異もする。特定の臓器に濃縮されることも明らかになっている。

※8 人類は2万年の進化の過程で地上に存在する微量の放射線に適応してきた。つまり自然界に存在する自然放射性物質を体内で認知し体外に排除するメカニズムを持った。ところが人工放射性物質はこの何十年で突然現れたため人体にとっては未知の物質である。しかも自然界のミネラルや金属と非常に良く似ているので人体は間違えて体内に取り込み新陳代謝メカニズムに混乱を起こす。しかも人体は微量元素を濃縮する作用と機構を持っているので、本来なら栄養を吸収するメカニズムがこれを濃縮する結果となる。

※9 アメリカの大規模穀物地帯の一つに、核施設の風下の街ハンフォードがある。ここには大型の核施設が多数存在し、人工放射性物質が地下水を大量汚染していることが明らかになっている。その土壌であらゆる種の作物が生産されるもっぱら輸出される。そこで採取されるものはリンゴ・ジャガイモ・小麦・コーン・牧草・蕎麦などだ。その大部分を買っているのはファーストフード産業と日本の商社である。他にも1950年代の大気圏核実験の人工放射性物質がまだ浮遊し、青森の六ヶ所村の核施設により汚染された水が太平洋に流れ込み、豊かな漁場を汚染していることも明らかになっている。食物を通じて我々は確実に被ばくしているのだ。

（「内部被曝の脅威」ちくま新書を参考）